

## 「西洋経済史」

奥西孝至他著

食料・環境領域 上席主任研究官 上林 篤幸



「西洋経済史」  
奥西孝至他著

ページ数：362 ページ  
出版年月：2010 年 4 月  
発行所：有斐閣アルマ

私たちが研究対象としている農林水産業も、経済の一部門に過ぎません。「ペティ＝クラークの法則」で述べられているように、一般に経済が発展し、人々の生活水準が向上するにつれて、農業など第1次産業の経済に占める比重が低下してきます。また同時に、農業は、マクロ経済全般、すなわち、家計消費の基礎となる国民所得や、物価上昇率、為替レートなどの影響を多分に受けやすくなる傾向にあります。それでは、今日の私たちをとりまく経済社会は、どのような推移を経て、農耕や牧畜を中心とした自給自足経済から高度に発達した工業化社会に到達したのでしょうか。日本やアジア諸国の経済成長は、ヨーロッパ経済が世界に拡大する形で形成された経済システムの中で達成されたものです。そのため、西洋経済史を学ぶ事は、単に「歴史に学ぶ」という有用性にとどまらず、現在の経済を理解する上で重要な意味を持っています。

これまでの西洋経済史の中心テーマは、18世紀末のイギリスの「産業革命」にはどのような前提が必要であり、工業化によりどのような社会構造が生み出されたかということでした。一方、近年は市場経済化という現象が重視され、商業の発達と市場経済の形成との関連、市場の構造・役割を知ることが重要になっています。本書は、近代の工業化と中世以降の市場経済化という2点を視野に入

れ、ヨーロッパ経済の動向を追っています。

本書の特徴的な点は、そのわかりやすい整理の仕方です。すなわち、「序章－古代から中世へ」、「第I部 近世(初期近代)－ヨーロッパの成長と拡大」、「第II部 近代－工業化の世界」、「第III部 現代－グローバルゼーションとヨーロッパの一体性」と、4部構成をとった上で、それらの各部の最初に、重要な歴史的事件等をまとめた略年表を提示しています。さらに、各部の下に数個のその時代ごとの重要なテーマを章としてまとめることにより、ヨーロッパ経済のこれまでの歩みが時系列的かつ体系的に理解できるよう工夫がなされています。

本書のなかで特に興味深かったのは、第I部第3章「ヨーロッパの工業化をどうとらえるか」です。20世紀後半を経て21世紀に入り、アジア諸国や中国をはじめとするBRICs 諸国などの新興国の経済的台頭を目の当たりにしている現在の私たちには「なぜヨーロッパだけが最初に工業化したのか?」といった問いの存在自体、もはやあまり意味がないことかもしれません。しかし、20世紀前半においては、工業国や工業化された地域と呼べるものはほぼ欧米にしか見いだすことはできませんでした。なぜヨーロッパという特定の地域にはじめて「近代的成長」が生じたのかが重要な問いであることは間違いないと思います。本章では、マッ

クス・ウエーバー、マルクスをはじめとして、上記の問いにまつわるさまざまな学説を丁寧に紹介しつつ整理してありますが、その整理の仕方は特定の価値観や史観にとらわれることなく客観的で淡々としたものです。それゆえ、分厚い専門書を何冊か読んだあげく迷路に陥るといった危険を避け、短時間で論点を理解する上で本章を一読するのは極めて有効な手段であろうと思われます。

現在の世界経済は、グローバルゼーションのトンネルの入り口にあるように思われます。すなわち、「リーマン・ショック」とそれに続く世界金融危機を経て、欧米をはじめ日本も需要不足に起因する景気の低迷、雇用の縮小、財政・金融政策の手詰まり感が蔓延する一方、BRICs 諸国等の経済は減速しつつも高成長を続けており、今後の世界経済の展望は不透明感を増しています。だからこそ、将来を見通すためには歴史と経験に学ぶ事が重要であり、そのようなモチベーションを持つ読者には、本書はお薦めできる一冊だと思います。